

放射線に関する Q & A

放射線は目に見えません。しかし正しく認識し、対処することで過剰な心配や、無用な被ばくを避けることができます。放射能対策室では定期的に、この Q & A を連載していきます。

監修＝相馬市健康対策
専門部会委員、東京大
学医科学研究所
坪倉正治
作成＝放射能対策室



Q 食品の基準値は、セシウムで100ベクレル/kg以下と設定されていますが、セシウム以外の放射性物質は対象としていないのですか？

A 基準値はセシウムからの影響だけではなく、半減期が長く、長期的に影響のある放射性物質による内部被ばくを考慮して設定されています。具体的には、今回の原発事故で大気中に放出されたと考えられる放射性物質のうち、半減期が1年以上のものすべて（セシウム、ストロンチウム、プルトニウム、ルテニウム）が対象となっています。

色々な放射性物質が存在しますが、セシウムに比べて他の放射性物質の存在量は少なく、例えば被ばくしてしまう状況であっても、その原因のほとんどがセシウムとなります。今現在の環境中には、セシウム以外の放射性物質は、セシウムに比べて圧倒的に少ないことが、これまでの国の測定結果で判明しており、セシウムに比べてどの程度の比率の影響があるかが分かっています。

このセシウムの基準値は、その比率を用いて、上記の放射性物質からの被ばく線量が年間1mSvを超えないように設定されています。基準値ぎりぎり

の食品ばかりを摂取すると、年間被ばく量で1mSvになるということです。

一般食品の基準値は100Bq/kgですが、乳幼児食品、牛乳は50Bq/kg（一般食品の半分）と設定されています。これは、子供は大人に比べて放射線への感受性が高いからです。

また、飲料水は10Bq/kgとさらに低い値が設定されています。すべての人が毎日摂取し、代替がきかないことからこのような厳しい基準となっています。

上記のような基準が設定されていますが、現在、流通している食品を摂取して、内部被ばくが増える状況にはありません。飲料水の基準も10Bq/kgとなっていますが、現実的には相馬市の水道水検査にて基準の100分の1である、0.1Bq/kgをこえていることもありません。

補足1. 一般食品100Bq/kgは全ての年代にとって問題がないのでしょうか？

年齢によって放射線からの影響は異なりますが、乳幼児をはじめ、どのような年代であっても、被ばく量は年間1mSvを下回るように設定されています。



出典および参考資料：厚生労働省＝食品中の放射性物質の新たな基準値、消費者庁＝食品と放射能Q & A